

京 都 大 学 理 学 部 構 内
遺 跡 発 掘 調 査 の 概 要

昭和47年11月

発 掘 調 査 担 当 者

京 都 大 学 理 学 部 助 教 授	石	田	志	朗
京都大学大学院文学研究科博士課程	中	村	徹	也
京都大学大学院文学研究科修士課程	中	村	友	博

I, 調査の経過

本調査は、京都大学理学部構内東南隅に理学部共同講義室等（ R^{5+1} 3,640 m^2 ）建設に伴い、その予定敷地内での遺構の存否を確認し、遺跡の範囲を明らかにしようとして次の要領で行ったものである。

調査対象地 京都市左京区北白川追分町

調査主体者 京都大学 総長 前田敏男

調査担当者 京都大学理学部助教授

石田志朗

同大学院文学研究科

博士課程2年 中村徹也

修士課程2年 中村友博

調査指導者 京都大学文学部講師

小林行雄

京都大学理学部教授

池田次郎

調査協力者 京都大学理学部地質学鉱物学

教室学生・院生

同動物学教室学生・院生

同地球物理学教室学生・院生

調査期間 第1次 昭和47年10月25日

第2次 昭和47年11月9日から11月22日まで14日間

調査面積 約600 m^2

1. 第1次調査

調査地は、平安時代までの旧白川の埋積谷に位置していることが、隣接の生物々理学教室建設工事の資料から推測された。そこで、10月25日、図に示したように長さ42m、幅1m、深さ1mの東西方向のトレンチとA～E5地点に深さ3mのピットを掘って、地層ならびに遺跡の存否の調査を行なった。この際トレンチ東端のピットAで、深さ2.5m～2.8mの黒色ないし黒褐色砂質粘土層から、数片の弥生式土器が得られた。この弥生式土器を包含する砂質粘土層は、西ならびに南へゆるく傾斜し、ピットBならびにCでは水底堆積の淡褐色砂質粘土層

で、弥生式土器片は含まれていない。

その弥生式土器包含層の上には、厚さ約 1.5 m の炭黄褐色の花崗岩質粗粒砂（旧白川砂）がのり、その上の地表下約 1 m の黒土層は現代の建築物の基礎ならびにその他の人為的攪乱をうけているところが多い。したがって、地表下 2.5 m 以浅には弥生時代以降の遺構ならびに包含層は存在しない。

以上の第 1 次調査の結果により、調査地東北部に弥生時代の遺跡があることがわかり、第 2 次調査を行なった。

2. 第 2 次調査

第 2 次調査は建設予定地東北部を東ならびに北にそれぞれ 4 m と 3 m 掘り、東西 24.4 m、南北 26.3 m の方形区画を対象範囲とした。そして弥生時代ならびにそれ以前の遺構を対象とした。その範囲は、南限が今出川通りに沿う掘りの約 4.0 m 内側、西限は現地質学鉱物学棟の東側線までで東南隅は地藏堂のため方形になっていない。

弥生時代の遺構が存在するとすれば、その面は遺物包含層下面であるから、遺物包含層より上の厚い白川砂層の除去はブルドーザーによった。さらに遺物包含層上約 30 cm に達して後は機重による遺構及び遺物の破損を恐れ、より細やかに作動できるユンボに替える配慮を行なった。

第 1 次調査により、弥生式土器を包含していた層を確認できたもっとも東寄りの地点は、本調査で定めた東端より西へ約 10 m の位置にあたり、地表下 2.5 m であった。ところが白川砂層を除去してゆくににつれて、東端では遺物包含層はもっと浅く、その上面が地表下約 0.9 m ～ 1.0 m に現われた。したがって包含層は東に高く西へ低く傾斜していることが判った。その段階より以後は注意深くユンボを作動させると同時に、東から人力により包含層上面の検出を急いだ。その結果 1.5/9.0 m の勾配で西に落ちる旧地表面を露呈させることができた。

遺物包含層の発掘に際しては、3.0 m 方眼のグリッドを設けた。地層観察用の幅 0.5 m のアゼで区画割りされた各グリッドを、東より西へ A 列・B 列・C 列・D 列と呼び、さらに北から南へ、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵと番号をつけた。例えば東北隅のグリッドを A・Ⅰ区、西南隅のグリッドを D・Ⅵ区と呼称した。（付図参照）

調査範囲内東端中央部及び、C・Ⅱ、C・Ⅲ、D・Ⅱ、D・Ⅲにまたがる地点の二ヶ所に、かつて設けられていた工学部アンテナタワーの基礎が残存しており、一辺約 2.5 m の方形に攪乱穴があけられていた。

この後包含層中の遺構の存否を確かめるために、わずかずつ削いで下げてゆき、包含層の厚

さを調べた。しかし遺構は発見されなかった。

弥生式土器片が発見された黒色ないし黒褐色砂質土からなる上部包含層は東端で厚さ約25cmで西へしだいに薄く、また粘土質になる。発掘地域内の東端から西へ約10mまで黒色～灰黒色であるが、より西方では暗褐色粘土となっている。反対に東方へはわずかに高くなりつつ本調査地域の東方へ続いているものと思われ、南北方向へもやや低く下がっているが調査地域以上にひろく広がっている。調査地域内で包含層下面が示す旧地形は、東から西へ傾き、台地又は丘陵の西縁斜面であり、南と北へもその斜面は東方へ後退し、調査地が最も西方へ台地がはり出した場所であると推察できる。調査区域東部の包含層は当時の黒色表土、中部は東方から流れ落ちたものが多く、西部は完全な水底堆積物である。したがってここに遺構を発見できなかったのは当然なことであると理解される。

この包含層は灰色粘土あるいは褐色粘土となって西方平坦部まで続いており、包含されていた土器片は転移してかなり西方までおよんでいるが、西に行くにしたがって頻度は粗となる。又傾斜面の裾に北から南へ流れていたと考えられる小さな自然流路がめぐっていたことが、東西に幅せまいレンズ状の砂層から推定される。流れ落ちた土器片はここにとどまり、さらに南へ運ばれた可能性がある。平坦面の発掘は西方へは、3.0m区画だけ掘げるにとどめた。

上部包含層より下の層序は、その直下に約20cm～25cm厚さの褐色砂質土層があり、さらに下に粒子の細かな黒褐色砂層が20cm～30cmの厚さで堆積している。この黒褐色砂層内に縄文式土器片が数片発見されており、厳密に言えば、この層を下部包含層と考えてよい。但しこの層も東方からの流れ落ちた堆積によるものであり、縄文時代の遺構は存在せず、土器の含量もきわめて少い状態であった。

上部包含層下面で地形測量を行った。この地形がそのまま弥生時代の地表面を示しており、白川砂層堆積以前の自然地形の復元に貴重な資料を提供することができた。

Ⅱ，出土遺物

遺物整理が終わっていないので、品目と簡単な説明のみにとどめる。土器はいずれも小さな破片である。

1. 縄文式土器 約80片。うち有文約10片。弥生式土器に比べ、より少量で、しかもより小さな破片である。①いわゆる緑帯文をもつもの、②口縁の内外面に凸帯をもち、ていねいに磨削されたもの、③小さい刻み目凸帯をもち、器面を貝殻調整したものなどがある。これらは縄文後期から晩期にかけての諸型式の断片的資料である。
2. 弥生式土器 約1000片。うち有文約100片。本包含地の主体をなす遺物である。

これらの土器は長石粒及び石英粒を多く包み、ヘラミガキ痕やいわゆるハケ目痕を顕著に残す。焼成は灰褐色、灰黒色、灰白色を呈するものが多く、稀に赤褐色を呈するものもある。以下に記す壺と甕以外の他の器種の検出およびそれらの細分的検討は今後の課題である。

〔壺〕

口縁は多くつよく外反し、胴部はふくれて、底部へとすぼまる。文様がみとめられるのは口縁部・頸部・胴部である。口縁端部は丸味をもつものが多いが、稀に面どりをもつものもある。また端部に一本沈線を圍繞するものもある。頸部と胴部の文様要素としては平行沈線、凸帯（圧痕・刻み目）がある。

〔甕〕

口縁はきわめて短かく外反し、胴部はあまり張らずに底部へとすぼまる。口縁端部に刻み目を入れているものと、入れないものがある。頸部は平行沈線をめぐらすことが多い。

これらの土器は弥生前期の比較的まとまった資料である。

3. 石 鏃 7個。

欠損品、未製品をあわせて、ヤジリ7個が出土。すべてサヌカイト製である。

4. 砥 石 1個。

欠損品ではあるが、二面に、それぞれ平行する二条の溝を残す。砂岩製。

5. 剥 片 約30個。

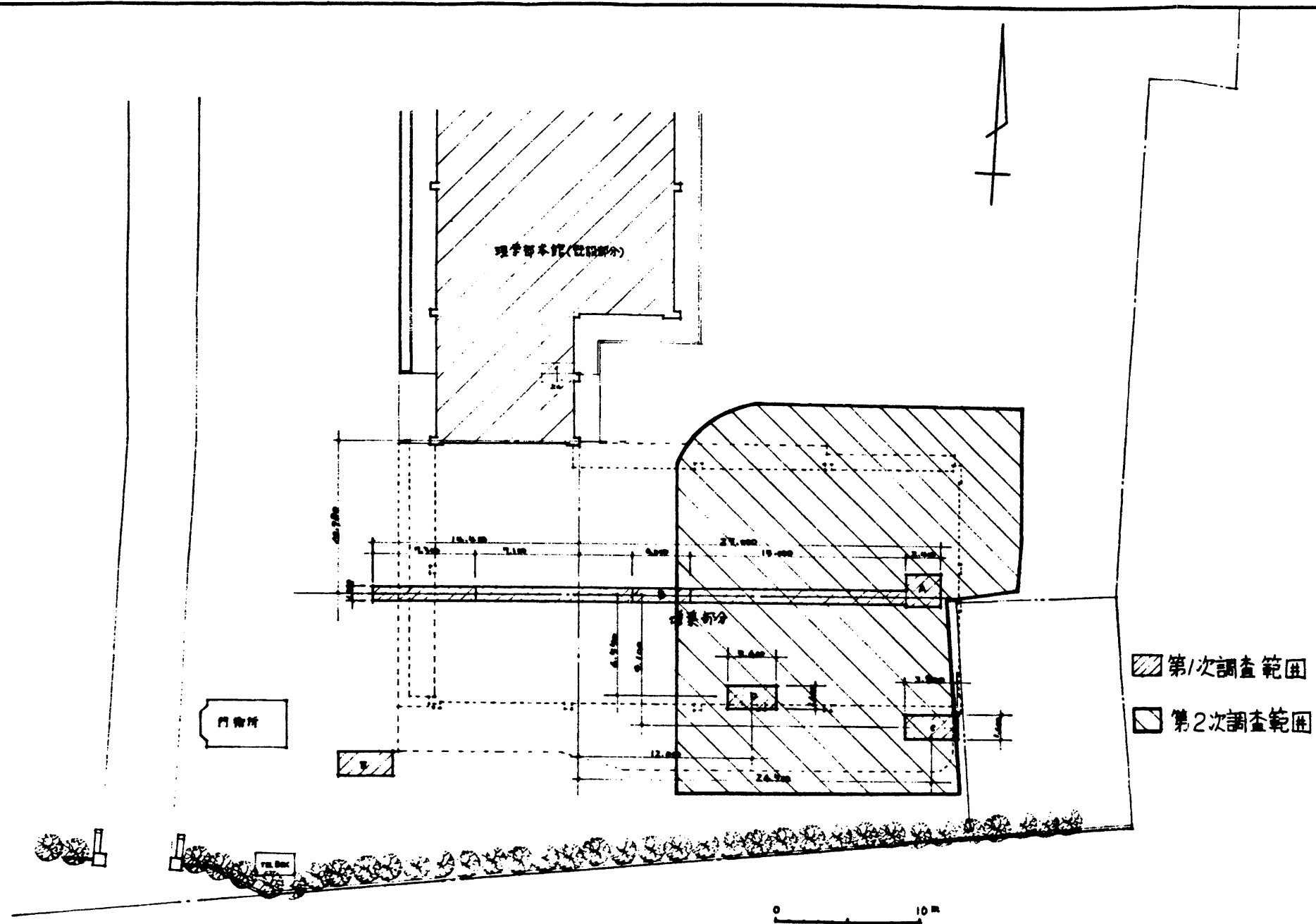
石器製作中に生じた剥片を採集。材質は大部分サヌカイトで、一部チャートがまじる。

本調査の結果、当地点は、東方に存在する縄文時代後・晩期および弥生時代前期の遺跡のあった台地西方の低地（おそらく川の氾濫原）に面した斜面に当たると考えられる。したがって北白川追分町内にはこの地点の東方に縄文あるいは弥生時代の遺跡が残存している可能性が高い。

上部包含層の示す時期は、出土遺物の項で述べたように、弥生時代前期であり縄文時代後・晩期の土器片の混在は東方に時期を異にする二つの遺跡が存在するのか、あるいは縄文式土器を有する弥生時代前期の人間の存在を暗示するかという今後の意味深い学問的示唆を生み出した。

山城においてかつて過去に発見された弥生時代前期の遺跡は、乙訓地域に限られていた。本調査はその分布地域を更に北方北白川の地に拡大したことによって、山城における弥生時代文化の成立に新しい資料を提供することとなった。

下部包含層中の縄文式土器片は、時代判別のできる限りのものでは一様に縄文後期の特徴をもつ。出土遺物についての詳細な検討をまって当遺跡の学術的報告を行いたいと考える。



第1図 京都大学理学部構内遺跡発掘調査位置図
(昭和47年11月)

工事名称	縮尺 1/200	図内
理学部増築予定部分発掘調査	昭和 27. 10. 26	号
配置図		計
調査名称		
	京 都 大 学 地 設 部	

